

豊庄だより

第 720 号 2022 年 8 月 22 日



福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

佐賀県在住の農民作家山下惣一（そういち）さんが亡くなりました。86 歳でした。すべての新聞に目を通してはいませんが、朝日新聞は 1 面のコラム「天声人語」（7 月 15 日）において、山下さんと半世紀にわたって農を論じ合った元農業改良普及員の宇根豊さんの話を紹介していました。

山下さんは、農作業を終え、家族が寝静まった後、太宰治やドストエフスキーを読み、村と農に思いを巡らせる、そんな時間を愛した人でした。また、山下さんは中学卒業後、父に反発し、2 回も家出を試みますが、それでも農家を継ぎ、村の近代化を夢見、国が推奨する減反政策にも応じ、ミカン栽培にも乗り出しました。しかし、ミカンの価格が生産過剰で暴落。「国の政策を信じた自分が愚かだった」と自分に話してくれました。農の問題は近代化すれば解決するものではない、近代化されないものだけが未来に残ると山下さんは気づいていたと宇根さんは思い出話を語っていました。※右の本（『農の明日へ』）は、農業の近代化の問題を問いかける最新刊です。

山下さんの代表作は、『減反神社』（1979 年）、『ひこばえの歌』（1981 年）でしょう。2 作とも日本農業の現状を農民の視点から鋭く描いた傑作です。どんなことが書かれているのかをここで紹介したいのですが、ずいぶんと以前に読んだ本でどこに保管したかわからず、今はだれも住んでいない実家を含め探してみたいのですが、見つかりませんでした。こんな時は、あとでこんなところにあっただと見つかるものですが・・・仕方なくネットで著作を検索すると、2 冊とも「品切れ」。図書館が古本屋さんで探さないと手に入りそうにありません。私に残っているかすかな記憶をたどりますと、『ひこばえの歌』は、農家の相続問題と将来の日本農業を憂う本で、NHK で「ドラマ人間模様」というタイトルで放映されたと思います。この本より少し前に書かれたのが『減反神社』。減反に揺れ動く農村を皮肉たっぷりに描き、直木賞候補にもなった作品です。

私が山下さんの本と最初に出会ったのは、『いま、村は大ゆれ』（1978 年）でした。日本農業は零細なので、規模を拡大して効率化を図る、これが近代化につながると言いながら、外国の農業をモデルにしても日本の現状とは合わない。また、国の言う通り真面目にやってきたのに、コメが余り、減反政策。当時の農業政策は「猫の目農政」と批判され、山下さんの本は、それに翻弄される農村の様子が見事に描かれていました。私は大学で農村社会の構造や農業政策について学んでいたため、とても面白く読みました。

ちょうどそんな時のことです。当時兵庫県の北部地域で、減反政策に反対している集落があるという情報を得ました。日本の農村において、政府の進める政策に積極的でなくても従うのが通例で、ここへ行けば何か見つかるかもしれないと思いました。期限が迫った大学に提出する論文のテーマは決めていたのですが、具体的な構成（材料を含め）はまだまだの状態の時で、とにかく現地を訪ねることにしました。大学の後輩の実家に泊めていただき、調査をしました。その集落を 1 軒 1 軒訪ね、話を聞きました。何の紹介状も持たない、見たこともない一学生からの聞き取りに好意的に付き合ってくださいました。また、役場にも行き、その地域の歴史などについても調べました。しかし、この調査（論文も）は未完成に終わりました。もう少し頑張っていればと、当時の原稿を見返しながら青春時代のほろ苦い 1 ページを思い出しました。

